

「斜視弱視の病態と治療方法及び治療効果」に関する研究のお知らせ

研究に関するお知らせ

帝京大学医学部附属病院では以下の研究を行います。

本研究は、倫理委員会の審査を受け承認された後に、関連の研究倫理指針に従って実施されるものです。

研究期間：2019年1月8日～2022年12月28日

〔研究課題〕

斜視弱視の病態と治療方法及び治療効果に関する研究

〔研究目的〕

斜視弱視は主に内斜視を契機に合併、もしくは内斜視と同時に発生する機能弱視（適切な訓練によって回復可能な弱視）です。本大学医学部附属病院眼科（以下、当科）では、両眼性固視検査において治療前の斜視弱視は全例がものを見る時に弱視眼を選択的に使用することが出来ない固視持続能力不良であることに着目し、その原因本態を両眼開放下でものを見ようとしても常に一眼（健眼）のみを目標固視の優先的に使用してしまう「一眼の優位性」にある位性と考えています。そこで、弱視訓練には敢えて1985年から両眼視下で行う健眼アトロピン点眼療法を採用し、弱視眼を選択的に使用する能力を獲得させることの固視持続能力改善を目的に訓練を健眼アトロピン点眼療法を行っています。2002年に治療後4年以上経過観察できた131名の治療成績を、2003年にこれらのうち最終受診時年齢が10歳以上の32例の長期経過予後を報告しましたが、今回は、最近の少子化と早期発見・治療の啓発活動励行が斜視弱視の病態疾病構造及び治療成績に与える影響について、新棟移転後に弱視治療を行った斜視弱視を対象に検討を行い、2002年の研究結果と比較して、今後の更なる少子化に向けた弱視治療の方向性を考えます。

〔研究意義〕

少子化が進んでいる現在の斜視弱視患者の病態と適切な治療方法を研究し、理解します。

〔対象・研究方法〕

2009年5月～2018年6月に当科を受診し弱視治療を受けた斜視弱視患者のうち治療終了後4年以上経過観察出来た症例の初診時年齢、訓練開始時年齢、弱視訓練法および訓練結果などを、カルテから後ろ向きに調べ、それらのデータを2002～2003年に当科で報告した結果と比較して調査・研究します。

〔研究機関名〕

帝京大学医学部附属病院眼科

〔個人情報の取り扱い〕

取り扱うデータは初診時年齢、治療開始時年齢、受診理由、弱視眼屈折度、不同視・DVDの有無、治療前固視状態、治療方法、治療経過、治療結果と治療に要した期間とし、すべて匿名で処理します。患者個々の調査項目情報は可能な限り数値あるいは+・-の記号のみとし、インターネットと繋がっていない独立したコンピュータに電子データとして入力し、データファイルはパスワードを付け保管します。研究責任者は、研究終了後はデータ全てを倫理委員会事務局に提出し、帝京大学臨床研究センターに10年保管の後に廃棄します。

対象となる患者様で、ご自身の検査結果などの研究への使用をご承諾いただけない場合や、研究についてより詳しい内容をお知りになりたい場合は、下記の問い合わせ先までご連絡下さい。
ご協力よろしくお願い申し上げます。

問 い 合 わ せ 先

研究責任者：医療技術学部視能矯正学科 教授 臼井千恵
住所：東京都板橋区加賀 2-11-1 帝京大学医療技術学部視能矯正学科
TEL：03-3964-1328（視能矯正学科直通）〔内線 41916〕